故郷は遠きにありて
雪の記憶

除籍

故郷は遠きにありて

雪の記憶

富島健夫

立風書房

故郷は遠きにありて

昭和52年9月15日　初刷発行

富島健夫青春文庫1
故郷は遠きにありて
著者＝富島健夫
発行者＝下野　博
発行所＝株式会社立風書房
東京都品川区東五反田三―六―一八
電話＝東京（四四七）一一九一（代表）
振替＝東京五―七四四九三
印刷所＝壮光舎印刷株式会社／株式会社美術版画社
（乱丁本・落丁本はお取替えいたします）
〇一九三―R五七〇一―八九〇九
© Takeo Tomishima, Printed in Japan 1977

目次

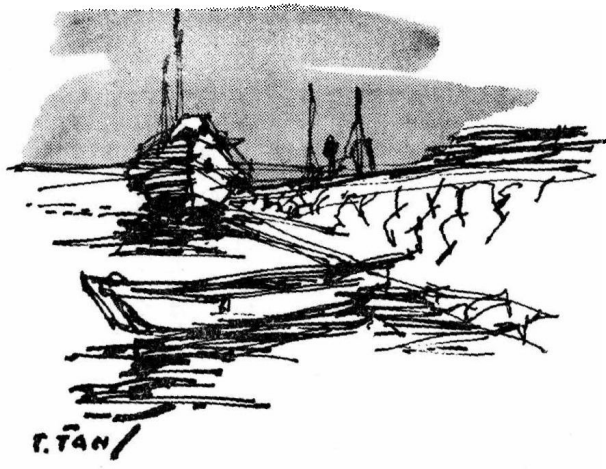
雪の記憶　3
故郷は遠きにありて　169
著者のことば　327

装幀　多田　進

さしえ　谷　俊彦

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

雪の記憶



序章

少年の日、海彦はまずしかった。敗戦の年の秋、一家は朝鮮から引き揚げてきた。そのとき、海彦は中学の二年生であった。リュックひとつを背に、ようやくの思いで日本へたどりついた一家に、親戚の眼はつめたかった。自分たちだけが生きてゆくのがせいいっぱいの、きびしい世相であったのだ。親戚たちは、三十年ぶりに日本へ帰ってきた老夫婦を中心とするこの厄介者たちの世話をする責任を、互いになすりつけあった。ときには、ささやかな全財産であるリュックのなかの衣類をねらったりした。

波の荒い夜の玄海灘をわたって夜明けがた、一家は博多の沖に、うすむらさきに煙る九州の山なみを見た。それより前、生命の危険にもいく度かさらされながら朝鮮の南端釜山の港に着いて、コンクリートの床の倉庫にうじ虫のような一週間ばかりを過ごした後、やって来た引揚船の船尾に小さな日の丸の旗がはためいているのを見たとき、海彦の心はどれほど熱くなったことだろう。敗戦以来、不吉な印象をともなっていたところに見受けられた韓国の国旗は、中学二年生の海彦の眼には、美しい日の丸を汚してつくられたもののように見えたばかりでなく、日の丸のはためくのを見るのは、絶えて久しかったのである。

博多に上陸してすしづめの汽車をいく度か乗り換えて、炭坑町の、母の実家の雨戸を父がたたいたとき、静まり返った深夜の町にその音が力無く響いていった。その家が焼けないで残っていたのに安心したためか、疲労がいち度に出て来た母は、リュックを道におろし、それを抱くような恰好ではいつくばっていた。自分の生まれた家さえ焼け残っていたならば、自分たちはあたたかく迎えられると母は信じていたのである。戸を叩きながら呼んでいると、二階から一人の男が顔を出した。それが母の甥であった。その甥が赤ん坊の頃は、おむつをかえたりおぶったりしたものだと、朝

鮮を発つに際して引き揚げ先を決めたときに、母は海彦たちに語って聞かせたものである。

金の上で世話になる気持ちはなかった。持って帰れる金は制限されている。しかし、いろいろの方法はあった。繃に百円札をない込む。リュックのたすきにぬいこむ。着いた夜、それをほどいてしわをのばした。

が、その金とてもかぎりがあった。それに物価は日毎に上がっていった。季節はそろそろ寒くなりはじめていた。あてがわれた二階の北向きの部屋で、火の気のない火鉢に背をまるめて、頭を抱え込んでもの思いにふけっている父の姿はたいへんに小さく見えた。父は五十のなかばをすぎていた。父は何をそうやって毎日毎日考え込んでいたのだろう。失われた財産や生活をだろうか。三十年の朝鮮での思い出を、あるいは帰ってきた日本の変貌した姿をか。これからの方針をか。あるいは父は無気力に何も考えていなかったのかもしれない。海彦はそのような父の姿を見るのがいやで、まずしい食事がすむと、近所の神社の境内に行って遊んだ。こども心にも、父の姿はいたいたしすぎたのだ。母がしきりに父をはげましていたのが記憶に残っている。

その母は旧知の人にあう度に、いろいろの話をした後に、「材料をいっぱい買い込んできて、一心に御馳走を作り、さて食膳についてそれを食べようとしたときに、ひっくり返されたようなものだ」というたとえを、ばかの一つおぼえみたいにかならずつけ加えるのであった。しかし母は、人にしゃべるだけ気が軽くなるのだろう。わりに元気なようすをしていた。

父が父の生家に漁業の手伝いに行くようになったのも、母のすすめによるものだった。父の生家はその山奥の炭坑町から遠く離れた漁港にあった。かつては父はその家の若主人として多くの漁夫を使っていた。今は父の甥が家業を継いでいる。父はそこに頼んで、住み込みで働くようになった。もとより報酬はわずかなものだった。気の小さな遠慮深い人間であった父は、その家でも、借りてきた猫のようにへりくだっていたにちがいない。けれども、母は父が何かをしなければ、このままでは心身ともにだめになると察したのであ

る。母の考えどおりに、ときおり、甥の家から魚をさげて帰ってくる父は、少しずつ元気をとりもどしつつあった。

母は近所の石鹸工場の水汲みにやとわれて行くようになった。姉は炭坑の購買部に勤めはじめた。そこへ、戦地に行っていた二番目の兄が復員して帰ってきた。兄は一度朝鮮に渡って、それから引き揚げて帰ってきたのである。その兄が炭坑に働くようになって、海彦たちは炭坑の長屋に越した。それは障子には紙もはってなく、壁はくずれ落ちた、雨期になると天井から気味の悪い虫がポタポタ落ちてくるあばらやであった。しかし、久し振りに一家水入らずで住む家であった。母はまめまめしく家の手入れをした。そして父が帰ってきたときは、何の気兼ねもなく、密造酒を買ってきて酒の好きな父に呑ませることができた。

海彦の上の兄は、海彦とは別に、やはり引き揚げて、別の港町に落ち着いていた。すでに結婚してこどもが三人もいて、妻子をやしなうだけでいっぱいであった。その嫂の妹の主人が土建屋をやっていて、兄はその下で働いていた。

そのような苦しい生活のなかで、海彦はその町の中学に転入した。末に生まれたためにとりわけ可愛がられていたし、海彦自身、家計などにかかわりなしに、学校をつづけることを強く望んだのであった。

その町の中学に通うようになって間もなく、海彦はあたらしく出来た友人と校門を出て家に帰りつつあった。談笑しながら街を歩いてゆく。ふと、海彦は気を変えた。

「きょうは炭坑のなかを通って帰ろうじゃないか」

そしてくるりと向きを変えると、今来た道を逆もどりしはじめた。その友人も異議を唱える理由がないので、海彦の後についてきた。街路を横切っているトロッコ線に沿って、二人は道を右に折れた。その方が家へ帰る近道なのである。その友人もほぼ同じ方向に家があった。

その夜、ふいに母が海彦に怒り出した。海彦が帰る道を変えようと思って廻れ右をしたとき、母は海彦たちが歩いて行きつつあった前方の店の前で買い物をして

いたのだ。水汲み姿の母を見て、友人の手前を恥じて、海彦が方向を変えたのだと母は思い込んでしまっていた。母は海彦に裏切られた気持ちでいっぱいで、声をふるわせてなじってくるのである。思いがけないことであった。海彦は母に気がつかなかったのだ。気がつけば逃げるはずはない。海彦は弁解した。しかし、海彦の弁解を母は信じなかった。弁解しているうちに、海彦はやりきれない気持ちになった。母がそのようにひがむのが悲しい。そのようなことで神経をとがらせる母になったのが悲しい。たとえ自分は気がつかなくても、母にそのような思いをさせたことも悔まれた。どうしてあのとき、自分が道を変える気になったか、自分の気まぐれにも腹が立った。それ以来、海彦は、周囲に眼をくばって、母の姿を見落とさないように注意しながら街を歩くようになった。

やがてその母が胃を悪くして寝込んだ。もともとさして丈夫でなかった胃が、引き揚げ以来の食事の悪変化に、急激に破壊されてしまったのである。

母の病気ははかばかしくなかった。炭坑の医者はおざなりの診察しかしなかった。専門医にかける余裕はなかった。ときに母は血を吐くようになった。

海彦は母の看病に忠実な子とは言えなかった。親類の家で頭を抱え込んでいた父の陰気な恰好を見るのがいやであったと同じように、母の苦しむ姿や貧しい家のなかの光景をみるよりも、友人としゃべったり、学校の図書館で好きな本を読むのを好んだ。山を散歩しながら、ひとりかってな空想にふけるのを好んだ。

そのうちに、病気の母が炭坑に働いている兄の、嫁の顔を早く見たいと言いはじめた。話がまとまって、兄が、同じ炭坑に働いていて、やはり朝鮮から引き揚げて来た人の娘と結婚したのは、海彦が中学三年、引き揚げて一年目の暮れであった。その嫂が嫁いできてまず最初にしなければならなかったのは、病床の母の看病であった。

胃が痛むので、母は一日中唸るようになった。唸れば、それだけ痛みをごまかすことができるのだ。母の横に寝ている海彦は、母の痛みをゆるめるために、起きて背中をももうと思いながらも、昼の遊びづかれで

眠ってゆくのであった。

二番目の兄が結婚して間もなく、新夫婦と姉を残して、海彦たちは上の兄のいる港町に引っ越して行った。その頃は、母の病気もあり、漁の仕事がひまになったため、父は家に帰ってきていた。病気の母はトラックの上に、引っ越し荷物の間に寝かせられた。その周囲に海彦たちがうずくまって、トラックは母が病気になったその炭坑町を後にした。わずか二十日ばかりのなじみであったが、下の兄の新妻は、病軀をトラックで長時間揺られねばならない母を哀れんで、ぽろぽろ涙をこぼし、自分たちが看病するから病勢のしりぞくまでここにそっとしておく方がいいではないかと、皆を口説いて廻った。しかし上の兄はこれ以上母を手離しておくのが不安であったし、上の兄がいくらかはくらしむきも楽であったのだ。それより何より、母はもっともかわいがっている海彦のそばをはなれて、他人であるその新妻の世話になりたくなかったのだ。頑として、一緒に行くと言い張ってきかなかった。

トラックはいくつかの町や村を通り過ぎ、山を上り峠を下って走って行った。日が暮れると、風が更につめたくなった。トラックの上で、皆はだまっていた。海彦の眼の下に、やせこけた母が頭から蒲団をかぶせられて、横たわっている。その髪が海彦の手に触れていた。

こうして海彦たちがその港町に着いた頃は、もう夜もふけていた。何よりも先に、母を家のなかに運び入れた。一行の着くのを待っていた嫂が、すぐに医者を呼びに行った。が、母はわりに元気であった。皆は安心して荷物を運び入れにかかった。

海彦は今度は上の兄に連れられて、その港町にもっとも近い県立の中学校に転入の手続きに行った。

その中学校は海彦の住むようになった町から汽車で二つ目の町はずれにある、歴史の古い学校で、そびえたつ松林が校舎をかこんでいた。生徒たちは角帽をかぶっていて、海彦の聞き馴れぬ言葉で話をした。校舎は、廊下がせまく、うす暗い印象を受けた。

引っ越しと共に学校をやめて働くことになるかもしれぬと懸念していた海彦は、深い安心を覚えていた。兄

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

は海彦とは二十も年がへだたっていて、父よりも恐かったのである。海彦は年が明けて三学期からその学校に通うことにきまり、汽車のキップが買えないので、兄と共に歩いて家に帰った。その頃は石炭不足で列車の本数がすくない上に、遅延ばかりしていたし、キップにも制限があって、何時間も並ばなければ買えなかったのである。

海彦がその角帽の中学に通う前に、ついに母が死んだ。正月の二日の夜で、嫁いでいた上の姉も帰ってきて、引き揚げ後二年目の、ささやかな正月の夕餉に皆がついているときであった。急に姉が箸を置いて、母の病間に馳けこんだ。と思うと、「お母さん、お母さん」と呼ぶ声が聞こえ、皆がはっと思って顔を見合わせたその耳に、つづいて姉の兄を呼ぶ悲鳴が聞こえた。あわてて皆が馳けつけたときには、もう母はぐったりして、姉の手に抱かれて眼をつむっていた。いつも誰かがついていたのに、そのときにかぎって母は一人きりだったのだ。大晦日あたりから痛みをうったえることも少なくなり、顔色もよくなって元気になっていただけに、父も兄も油断をしていたのである。ちょうどろうそくの火が消える寸前に炎が明るくなるように、その正月を境にした三日間に、母の生命は燃焼しつくしたのだろうか。考えればあのふいの元気さは異常であった。

姉が箸を置いてかけつけたとき、母はまだ生きていたという。なぜ急にかけつけたか、それは本人自身もわからないと言って、姉は泣いた。誰もみな、涙をこぼしていた。

しかし、海彦は泣くことが出来なかった。母が死んだ。それはたしかにわかった。まだおさなかった頃、もしこの母が死んだら、と考えたことがある。考えただけで、そらおそろしかった。あわててそういう想念をふりきって、別の考えにきりかえていたものである。海彦には、母の死は自分の世界の消滅を意味していた。が、さて、実際に母が死んでも、意外に気持ちは平静なのである。実感がともなわないと言ってよいかもしれない。ただ海彦はぼんやり虚脱した状態にあった。涙とは縁が遠い。

海彦にとってもっとも大切な人がいなくなったということ、母の死に海彦が非常な打撃を受けたことが、海彦自身に意識されはじめたのは、ずっと後年になってからであった。

海彦が角帽の中学に通うようになったのは、このように、母の死の記憶のなまなましい一月のなかば頃、中学三年の三学期からであった。もとより友人はいない。ひとりで駅へ向かい、汽車を降りては、ややうつむきがちに学校へ歩いてゆく。そして無意識にまたなかば意識的に、自分が憑うあたらしい存在を求めていた。

この物語は、こうして海彦が角帽の中学校に汽車通学するようになった最初の朝から、始まるのである。

第一章

一

雪の朝であった。道も屋根も白い化粧をして、牛乳色の空からは、ゆっくりと粉雪が舞い降りていた。海彦はしみのついた番傘をさし、片手に学用品の入ったふろしきを抱えて、下駄の跡を道に刻ませながら駅にたどり着いた。

駅には汽車を待つ男女の通学生や一般の乗客が、にぎやかに話し合っていた。ふざけ合っているのもいる。海彦はかたすみに入って傘についた雪をはらい落とした。中学生たちのなかには角帽も多かった。同級生もいるにちがいない。まだ角帽を買っていない海彦は、普通の中学校の丸い帽子に、その角帽の学校の校章をつけていた。人がそれに気がついたならば、いか

にもへんであろう。角帽を作らねばならぬことを家の者に言わねばならぬ苦痛を考えながら、海彦は帽子に手をやったりして、なるべく目だたぬようにひっそりと改札を待った。

改札が始まった。海彦は皆の後から小さくなって改札口を通り、ホームに出た。女学生たちはホームの中央あたりに群らがる。中学生たちは後尾から中央へかけて大きくひろがっている。その間を普通の乗客が点在している。海彦は学生たちのいない場所を選んで、傘で帽子をかくすようにして立っていた。

白い息を吐きながら汽車が入ってきた。列車はかなり混んでいた。海彦は列車が停まると同時にうまく把手を掴み、ステップに片足をかけた。なかからドアが開く、降りる人がつづいてあらわれる。すむと、海彦はまっさきに乗った。闇屋らしい男が、通路に荷物を置いて、またがって腰かけている。海彦は内部へ進み、適当な所に止まって、車内を見まわした。

海彦のたちどまった二つ先の席の、海彦の方を向いた通路側に、その少女は腰かけて顔を上げていた。海彦はその少女のそのときの姿は微細に記憶してはいない。オーバーは深い紺色であった。髪を左から分けてそれをとめているピンは金色であった。金色に光っていた。少女は背をのばして、正面から海彦をみつめている。その眼と、車内を見廻していた海彦の眼は合ったのだ。

海彦は咽喉の奥で小さな声を発して、おもわず顎を引いた。闇屋と煤煙とだみ声の車内ににわかにあざやかな花が咲いた感じであった。少女の眼はやや大きく見開かれていた。はっきりした二重の、くろめがちの、澄んだ色に、何かもの言いたげな表情を海彦は感じた。その眼がもっとも印象的であった。少女が漠然と海彦を眺めているのではないことは、あきらかである。海彦は身動きもできなくなった。列車がいつ動き出したかも感じなかった。眼を、そらせなかった。

少女も眼をそらさなかった。海彦をみつめる眼にいくらか意志が加わったのを感じる。少しずつ、海彦は自分をとり戻してきた。視線をそらしたら負けだと考える。視野を窓外の景色が後方へ走ってゆくのを感じ

る。乗客たちの話し声がふたたびよみがえってきた。丸帽に角帽の中学の校章をつけていることが意識に上った。その瞬間は、海彦の顔は赤くなったにちがいない。少女の紺のオーバーの襟についているのは、その角帽の中学の近くの女学校の校章である。少女は海彦の丸い帽子を冷笑をこめていぶかしんでいるのではなかろうか。そういう疑いが脳裡をかすめた。が、少女の眼にはそういう色はみじんもないことが直感できた。少女の眼は海彦の眼に深く注がれたまま動かない。

次に海彦はこの寒い雪の朝に、自分がオーバーも着ていないことをあらためて意識に上らせた。こだわる。それに反撥して、強く少女の眼を喰いとめる。少女の容貌の特徴をひとつひとつ頭にたたみこむ。輪郭は丸顔で左頬がかすかにこけている。長いまつげが眼の色を深くしていた。ふたえまぶたの左の眼の下に近く泣きぼくろがある。鼻筋はとおっていて、唇は縦には小さく、まるみをもっている。……

少女はまたたいた。なおもみつめつづける。何をそう見ているのだ。海彦は眼にそう語らせた。すると少女も同じ問いを投げてきたように思われた。二人を睨み合わせたまま、列車は雪の野を走り、汽笛を上げ、鉄橋をわたって、次の駅の構内に進んで行った。速度が落ち、車輛は岐れるレールを渡る音をたてた。

急に少女の表情が弱くなった。またたきが多くなり、ゆっくりになった。海彦をみつめつづけた眼に複雑な陰翳が加わったと思うと、少女は顔を伏せた。ようやく海彦もほっとして窓の方に顔を向け、外の光景を眺めた。列車は静かに駅のホームへすべりこんだ。

海彦の乗る駅からその駅まで十三分はかかる。そのほとんどを、二人はみつめ合ったまますごしたのだ。その時間の長さや、他に男女の学生を含めた乗客がいるという状況を考えて、この雪の朝の出来事は、海彦にとっては異常な体験であった。

ふたたび少女は顔を上げなかった。膝の上に鞄をのせ、鞄の上に手を置き、その手をみている恰好である。周囲に、少女の友だちらしい者もいなかった。

海彦の降りる駅に着いた。少女が起つのを確かめて、海彦は出口へ向かった。ホームは沿線の各駅から

乗った男女の学生でたちまちいっぱいになる。その群れが改札口へ流れる。下り列車は駅舎に沿ったホームに着くのだ。海彦も少女も、はなればなれにその群れにとけこんで行った。

翌朝、海彦は内心のためらいを強引にふりきって、同じ車輛に乗った。少女は多分海彦より遠くから通っている汽車通学生であろう。が、同じ車輛に乗るとはかぎっていない。海彦も特に期待をしているわけではなかった。

海彦の眼が少女にとまると、海彦をみつめていた少女の眼が非常にゆっくりと右にそれ、窓をみやって、手で軽く髪を撫でて顔は伏せられた。少女は昨日と同じ席に腰かけていた。おそらく偶然であろう。が、海彦は感動を覚えた。その感動には羞恥がふくまれている。あわてて英語の参考書を持ち直した。列車が入ってくるまで、プラットホームで、海彦はそれを読んでいたのである。ひろげた。頭には入らない。視野の一点にがっきと、少女を意識している。それから他の乗客の眼を意識した。昨日の乗客とはちがう。けれども海彦には、その乗客たちが昨日の海彦を知っていて、心の奥をみすかす証人のように思えたのだ。

少女はときどき顔を上げて窓を眺める。そのままその顔が何気なさそうに動いて海彦の方に向けられ、海彦の顔でとまって、伏せられる。少女はたしかに海彦を意識している。それを感じて、海彦は胸のときめきを覚えた。偶然、であっただろうか、二人の視線がかさなった。海彦はあわてた。思わず顔をそらした。すぐにそんな自分に反撥し、よじるように顔をもどした。少女の眼は前日と同じように澄んでいた。ややあって、少女は顔を伏せて頬に手をあてた。それから少女は一度も顔を上げなかった。

列車が、降りる駅に着く。少女は顔を伏せたままひろげていた本を鞄のなかに入れた。海彦は軀を出口に向けた。ホームを改札口へゆっくり歩く。降りた客たちが後から海彦を追いこして先へ急いでゆく。すこし不自然なほど自分は遅いと思いながら、先へ越してゆく人々の背に注意する。少女はまだ背後にいる。もう追い越してもよい頃である。が、横をよぎって先へ出

るのは、他の人たちばかりである。改札口の近くで、海彦はふり返った。もうほとんど後につづく人はいなかった。海彦の数歩後を、うつむいたまま、少女は歩いていた。海彦と同じ速度である。そのとき、海彦は少女が黒い革の靴をはいているのを見た。急に海彦は歩を速めた。

その翌朝、同じ車輛に乗る海彦の気持ちには、一種の悲壮さがあった。最初遇って、二度目にいないのはよい。探し廻るようなことを自分はしないことを自身よく知っている。幻の花を見たという思い出を持つだけにとどまる。そしてそれでもよかった。が二度遇った今は、今度少女がいなければ、海彦の失望は大きい。少女は海彦を避けて他の車輛に移っているかもしれない。そう思うとさらにみじめである。

少女は同じ席にいて、同じように眼で海彦を迎えた。四日目も、五日目もそうであった。少女ははっきりと海彦の乗ってくるのを待っている。そうでなければ常に同じ席に坐っているはずがない。海彦は幸福を感じていた。が、その幸福感はより深い幸福へ進みたい願望をおさえている妙にはがゆい幸福感である。しかし海彦は、最初の朝たちどまった位置から一歩も少女の席へ近づき得ないでいた。

できれば話しかけたかった。はなれて一人でいるときは、話しかけるのはいとも簡単に思えた。が、いざとなると勇気が出ない。考えるだけで息苦しくなった。

日曜が来た。海彦はものたりない一日を過ごして、月曜の朝を待った。一日おいたので、少女はいなくなっていはしないだろうかという不安を覚える。一方、日曜でもあの列車には少女が乗っていそうな気もしていたのだ。

月曜の朝、海彦はあたらしく作った角帽をかぶっていた。二人の視線が合った。少女の眼が上にそれた。すぐにその眼は海彦の眼に帰ってきた。海彦はある羞恥を感じ、それをごまかすために苦笑いをうかべようとした。いや、顔をしかめようとしたのかもしれない。とにかく、一つの表情を作ろうとした。同じ瞬間、少女は白い歯をこぼして海彦に微笑を送ってきたのである。誘われるように、ごく自然に海彦の顔にも微笑が

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong